

縄文早期の近畿地方には 300 人（本校の生徒数より少ない）しかいなかった

一説によると、縄文時代早期の近畿の人口はたった約 300 人、日本の総人口は約 2 万人だった。当時の食料がそれだけの人間しか養えないレベルだったということだ。米づくりが始まった弥生時代になると、日本の総人口は約 61 万人、社会の仕組みが整いつつあった古墳時代には約 540 万人、圃場が整備された江戸時代には、約 2600 万人へと増え（いずれも推定 S.Koyama1978）、食料を輸入する現代（2020 年）には 1 億 2,580 万人となっている。一方、食料自給率が年々低下しており、2021 年には、38%しかないのはご存じだろうか。食料を輸入しない時代であれば、約 4780 万人しか日本で生存できないことになる。

「稲作文化が『日本』を作った」

日本人といえやはり米だ。『世界史を大きく動かした植物（稲垣栄洋・PHP エディターズグループ）』では、「稲作文化が『日本』を作った」とまで言い切っている。循環型で地縁社会が発達した日本だ。

米作りは、弥生時代に西日本から始まる。当時の人々は採集・狩猟・漁撈などに食料を頼っていた。森林に恵まれクリやコナラなどの木の実が豊富にある東日本で人口が多く、稲作の重労働をしなくても食料が豊富にあったのだ。縄文時代早期の人口は、東日本約 12,000 人、近畿約 300 人。弥生時代には、東日本約 130,000 人、近畿約 110,000 人（いずれも推定 S.Koyama1978）となっており、米づくりが始まった弥生時代に西日本で一気に人口が増えている。食料の生産が増えれば、養える人口が増えるということだ。

「農業は安定して食料を得る手段であるが、重労働を必要とする。人類は、安定した食料を手に入れた代わりに、労働しなければならなくなったのである。（中略）植物の種子は、その時食べなくても、将来の収穫を約束してくれるものである。保存できるものだから、たくさん持っていて困るものではない。保存できるということは、分け与えることができる。つまり、種子は単なる食料に留まらない。それは財産であり、分配できる富でもある。そして富が生まれたのである。（中略）胃袋に入る量には限界があるが、農業によって得られる富には歯止めがない。（中略）こうして農業によって人類は人口を増やし、村を作り出し、村を集めて強大な国をつくるようになる。『富』を持つ者と持たない者には格差が生まれ、富を求めて、人々は争うようになった。こうして、農業の魔力によって、人類は人類となっていくのである。」（『世界史を大きく動かした植物』）

収穫量を増やすための工夫が圃場を整備し、水を田の隅々にまで行きわたらせる灌漑の技術が土木技術、農耕のための道具作りが鉄器の改良に結びつき、軍事にも応用された。種もみは貯蔵でき、それが「富」になる。米の生産には、水の管理などの指導者が必要になり、それが貧富の格差を生んだ。領地を拡げることが、米の収穫量を増やし、「富」を増やす。それが領地を争う戦乱につながり、群雄割拠の戦国時代となった。江戸時代になり政情が安定すると、領地の取り合いではなく、領地の中の圃場を増やし、品種を改良し、農具を改良して石高（米の収穫量）を増やすことにシフトした。稲作が循環型で地縁社会が発達した日本を作ったのだ。その頃、田んぼをどんどん増やしていった。ブルドーザーなどの機械がない時代に、人力で圃場を整備していったのだ。よく「田んぼしかないような何もない田舎」という言い方をするが、先人が田んぼをつくるのにどれだけ大変な思いをしたかということを思うと簡単に田んぼはつぶせない。米の収穫に感謝。



<関係資料>

人間は植物の奴隷？

世界的に見ても、熱帯地域では 21 世紀の今でも森林に少数民族が生活しているが、それは、森林に食料が豊富で、農業の重労働をせずとも人間が生きていけるからである。一方、砂漠地帯と呼ばれる厳しい乾燥地域にある大河のほとりから人間の文明は発展した。メソポタミア文明、エジプト文明、インダス文明、中国文明などだ。乾燥地帯では、食料が思うように生産できないところから、人々は水を管理し、工夫に工夫を重ねることで、農業技術を向上させていった。計画的に栽培するには指導者も必要になり、人が暮らすことで様々な文明を開花させていった。そこから格差社会や領地を争う戦争も始まったのだ。

「地球の支配者は植物であり、人類はその世話をさせられている奴隷だ」（前述）ともある。植物が富を生み人間が翻弄されている。水や肥料を施され何不自由なく大切に育てられているのは、植物なのだ。

We keep on trying. 挨拶日本一の高校・遅刻ゼロの高校を目指して 文責：姫路別所高等学校長 篠原 歩